

おおの みきこ●1992～96年、ホーチミン市の(現)人文社会科学大学に留学。研究テーマはメコンデルタ開発を主軸にしたベトナム南部の近代史・村落社会研究



おおの みきこ  
大野美紀子  
神戸外国語大学非常勤講師

# 穀倉地帯 メコンデルタで 多角化、 分業化が 進んでいる

カンター市郊外のソーンさん。「減農薬野菜はカンター市、カマウ市などに卸す。キュウリ、カボチャ、ニガウリなど短期栽培種が主、多種類のほうが高収入となる。ホーチミン市の仲買人がこの畑のことを知って買い付けにきたので、収入が増えたよ」



メコンデルタは、メコン河下流域に広がる面積約4万ヘクタールの広大な沖積平野であり、ベトナム最大の穀倉地帯、そして世界有数の穀倉地帯と言っても過言ではない。近年、工業発展がめざましいベトナムであるが、米は

依然として外貨稼ぎ頭の主要品目であり、輸出量は世界第5位(2005年FAO統計)を誇る。メコンデルタは、年間二期、三期、条件によっては四期と、通年稲作が可能な恵まれた気候と広大な面積をもって、米輸出大国を支えている。稲刈り間近の稲穂と田植えしたばかりの水田と苗代が隣りあって並ぶ、年間一期作の日本では想像も及ばない光景も珍しくない。

## デルタ中央部にある豊穡な空間は 複合農業経営地帯に変貌した

メコン河が運ぶ肥沃な土壌が堆積するデルタ中央部には、「ミエットヴォン(果樹園の地)」と呼ばれる豊穡な空間が広がる。道路越しに見える家々は、垣根の植栽に花々が咲き、前庭の中心に「バンテイエン(天壇)」と呼ばれる天を祀る一本足の祭壇が立っている。家屋の正面にはテラスが設けられ、家族が憩うスペースとなっている。

家をめぐって果樹、蔬菜が植えられ、敷地を区画する掘割には小舟がもやい、鶏、アヒルが群れる。後庭を通過して丸太橋を渡ると水田が広がっている。米、果物、蔬菜、魚、家禽、熟帯の豊かな自然に恵まれた地で、代々農業を営む

メコンデルタ農民の姿は、ベトナムのみならず私たちにとっては理想のカントリーライフを体現している。

この豊穡な空間は、90年代半ば以降、ベトナムの市場経済化と都市化が進展するにつれて、国内外市場の需要に応じて、稲作専業地帯から畑作、果樹、養豚養魚に多角化した複合農業経営地帯へとシフトしてきた。メコンデルタ農業を主導するカンター大学は、農村経済の発展をめざし、生態条件をフルに活用したホームガーデンプロジェクトを提唱し、以後プロジェクトはいくつかのステージを経ながら、現在はVACG農家モデルを展開している。

従来の稲作中心農業からより市場価格の高い、野菜・果物(V)、養魚(A)、養豚・養鶏(C)の生産サーキュレーションと、養豚・養鶏から発生した廃棄物の飼料・バイオガス利用(G)を連結することにより、高収入と環境に考慮した持続的発展をめざす農家経営を実現しようとするものである。

カンター市郊外に住むティンさんは、果樹、養豚、養魚の多角経営を行なっている。0.5ヘクタールの果樹園にはオレンジ、マンゴー、ドリアン、ミルクアップル、竜眼と多彩なトロピカル

白い導管がバイオガス発生装置(右)。養豚で出た糞を埋設したパイプ内で発酵させ、発生したガスは台所へ。発酵した糞は水と土を通じて養魚池に流れ込んで魚の飼料とアンチビートルスに利用。養魚池の水は果樹園に供給される。96年にモデル農家になったタインさん(左)は「このサイクルは養魚、果樹園の肥料・飼料の低減に役立ち、環境、衛生問題を解決する」と言う



ルーツがなり、その一角に養豚小屋、養魚池が隣接し、間を白いビニール囲いのバイオガスパイプが結んでいる。

また、伝統的に商品作物生産に特化してきたメコンデルタの農民は、市場のニーズに敏感であり、将来性があると見極めると、新しいプロジェクトへの参画をためらわない。ソーンさんは、数年前から仲間を集めて生産クラブを結成し、政府が奨励していた減農薬野菜を栽培し始めた。

### デルタ奥地の最後のフロンティアで移住者たちが作り農業を営む

しかし、メコンデルタのなかでもこのような豊穡の地に暮らす農民はきわめて限られている。メコン河の恩恵を受けた肥沃なデルタ中枢を離れ、さらに奥地へ入って行くと、「広大低地」のロンセン・クアドラングルとドンタップムオイが広がる。

この両平原は、かつてフロンティアであったメコンデルタのなかで、最後まで残ったフロンティア空間である。隆起した海底は平坦なメコンデルタの巨大な陥没地となつて、雨季には氾濫原となり、海底痕の硫酸塩土壌は日々メコン河の潮汐もほとんど届かない

ため、何ものも生み出さない不毛の地となつていた。

この広大な無人の荒野に、80年代末以降、ホン河(紅河)とメコン河の南北デルタの人口圧を解消するために、政府は運河を開削し、悪い土壌を洗い流し、盛り土して人工の高みを造成し、開拓移住を奨励する巨大プロジェクトを推進してきた。南北デルタ農民は移住政策にのつて、あるいは自発的に、故郷を離れ広大低地へ移住した。

ベトナム政府はカンボジア国境のドンタップムオイ平原を一面の水田地帯へと変貌させた。とりわけ2000年の大洪水を機に、政府によるインフラ投資は本格化し、移住者の定住を促進するために、ライフラインとなる道路や学校・医療所等の公共建築、そして集住区がつくられた。

雨季になると、毎日、テレビ、ラジオでは天気予報に続いてメコン河の各地点での水位が読み上げられる。雨季の終わりにはまた水の季節でもある。人々が居住する自然あるいは人工の高みと、それら島々をつなぐ細い紐のような道路を残して、水田地帯はゆっくりと水に沈んでいく。

水の季節は稲作ができないため、失業

広大低地ドンタップムオイ平原は雨季に全域が海と化し、生活よりもまず生存することが優先される過酷な環境である



の季節ともなる。遮るもののない広大な平原では、雨季の雨は風を呼んで暴風雨と化し、老人や子どもにとつてきびしい環境となるため、故郷を持つ人々は刈りが済むやそそぐさと帰郷する。この地に定住している人々は、手慰み程度の漁や家屋の修理をするか、娯楽も少なく退屈な日々が続くこととなる。

ミエツトヴオン東端カウインハウ村の人々は、80年代末の移住政策を契機として、この地に移住した。移住当初の開拓期における種々の困難(酸性土壌、鼠害、大洪水)の果て、約20年近くを経て残った人々は、故郷では十分に



集住区につくられた公共建築物。集住区は運河に沿って細長く造成され、区画された側溝と道路が交差する。雑草が茂る平地に、ぼつん、ぼつんと公共建築物が建つ

営農する土地を得ることができず、新天地を求めた開拓者の子世代と子世代に継承する農地を維持するために、故郷と開拓地を依然として往復している。出作り農業を営む移住者たちである。

故郷カウインハウ村と開拓地の生活格差は広がるばかりである。故郷の村は国道沿いに立地する地方都市近郊農村で、急速に市街地化し、村民の収入は建設・工事現場労働や工場勤務によるものが大きくなりつつある。農業収入では生活できないが、国道沿いの地元ではもはや土地など到底手に入らない。親の義務として、息子たちが独立するために家屋や水田を賄わなければならない。

水の季節を故郷で過ごしたカウインハウの人々は10月の乾季に入り、メコン河の水が退くときを待って、再びカンボジア国境まで稲の作付けに出かける。**デルタに張り巡らされた水路網を仕事を求める人々が往来する**

90年代以降、幹線道路が整備され、水路網の役目は相対的に落ちたとはいえない。いまだにデルタ奥地へ入るには縦横無尽に張り巡らされた水路が欠かせない。幹線道路からはずれると、四輪

車両はほとんど通行できない。二足、二輪のバイク、自転車、そして舟で往来する自然・人工の河川、運河、水路が交通路となる。陸路を行くよりも時間がかかるとはいえ、安価な運賃で搭載量の大きいサンパン（小舟）による河川交通は、米・砂利といったバルク品目においては物流ネットワークの要である。

穀倉地帯の米を輸出ルートに乗せるのもサンパンを陣頭指揮する米仲買人たちである。女性の仲買人も多く、地元各村々を、ときに数日をかけて遠方を回り、サンパンと船員の男たちを指揮して米を買い付け、輸出穀物商社に売却する。

メコン河が運ぶのは物資だけではなく、人もまた舟を家として、メコン河に居住する。「2000年の大水のときに陸に上がったよ。ここは高燥だし、仕事にもありつける」

ラムさんは各地を放浪したあと、ドントップムオイの村の堤防脇に定住した。上陸するまでずっと住処としていた舟を堤防上に据え付けて寝床、そして物置としてまだ利用し、お金ができると建材を買って少しずつ陸の家を建築したのである。ラムさんのような水

陸両生の人々を見ていると、メコンデルタにはまだまだ水上居住民が残存しているかもしれないと、往時のフロントニアであったメコンデルタの原初空間に思いをはせる。

稲作は人手を要する産業である。稲刈り機やコンバインがまだまだ普及途上のベトナムでは、とりわけ収穫に要する労働力需要は大きい。ドントップムオイという広大な水田地帯では、収穫期になると隣国カンボジアから、メコンデルタ各地から、日雇いの口を求めて人々が集まる。とりわけ目立つのは、ベンチュー人という稲刈り人を指すほどに、メコンデルタ最下流ベンチューから水路依いに三々五々小舟を連ねて、稲刈りに来る人々である。10名前後の若い男女が仲間と連れ立ち、水田脇の畦で煮炊きしながら舟上に仮泊し、収穫期の1〜2カ月間稲刈りをしながら転々とする。

穀倉地帯メコンデルタは、19世紀半ば以降の米モノカルチャー経済構造から脱し、その恵まれた生態環境を利用して多角的な農林水産業を展開し、またデルタ内における産地分業を行なうまでに多様化しているのが現在の姿である。☺